

本学図書館では、学生や職員が書店で気に入った本を選ぶ「選書ツアー」を、2016年から年1～2回実施しています。本年度最初の選書ツアーは16日（土）、金龍堂まるぶん店で開催し、11人が思い思いに本を求め店内を散策しました。

選書ツアー

お気に入りの本見つけた？

見て触れて…書店散策



買い物かごを手に、本との出会いを求めて書店内を巡る参加者



選んだ本は、店内2カ所に設けた専用ストッカーへ。その場で、図書館にないかどうかをチェックしました



図書館の一角には「学生選書コーナー」が設けられ、選書ツアーで加わった本が展示されています

図書館によると、選書ツアーは専門書だけでなく、学生の目線で「読みたい本」を選んでもらい蔵書としてそろえることで、ふだん本を読まない学生にも読んでもらおうという狙いで始まりました。熊本市と近郊の本屋を選んで開催し、毎回、学生、教職員2～8人が参加しています。過去10回（オンライン開催1回含む）のツアーで加わった蔵書は計1483冊。毎回、「学生選書ツアーコーナー」を設け、一部に選んだ人のコメント付きで展示しています。

通算11回目となった今回のツアーは、新型コロナウイルス感染拡大のため、開催日が急きょ授業日と重なったこともあり、学生の参加はわずか1人となりました。唯一の参加となった医学検査学科1年の女子学生は「手に取って、読んで買えるのがうれしい」と時間も忘れて本との出会いを堪能。「実用書や豆知識を中心に選んでいます」と10冊以上をストッカーに運んでいました。また、「本は専らネット注文で」という初参加の女性教員は、「いろんな本との出会いがあって楽しい」と話しながら「鎌倉殿」関連の本に手を伸ばしていました。この日は、最新の専門書から歴史書、小説まで硬軟織り交ぜ181冊が新たに蔵書に加わりました。

飯山準一図書館長は「本を挟んで普段なかなか話すことがない教員や学生の皆さんと交流できるのも楽しい」と、ツアーの魅力を語っています。図書館では、次回ツアーを今秋にも計画しており、「好きな本が選べる選書ツアー。ぜひ参加してください」と呼び掛けています。（NL編集班）

第7波到来 検体急増に大忙し

寄稿

新型コロナウイルス感染が第7波の様相を呈してきました。熊本県内でも感染者が急増し、外部からPCR検査を受託している新型コロナウイルスPCRワーキンググループでは、扱う検体数が増えています。多忙な毎日を送る檜原真二グループ長に、本学における検査作業の現状について寄稿してもらいました。

新型コロナウイルスPCRワーキンググループ 檜原 真二グループ長

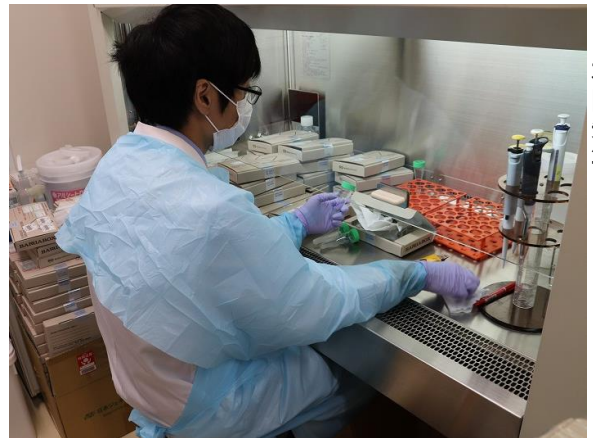
2020年9月に学生・教職員の新型コロナウイルスPCR検査を開始した。その後、同年12月からは熊本市医師会、臨地実習先関連病院など外部からの検査も受託している。これまでの検体数は累計で3万件以上の臨床検体と4000件弱の行政依頼検体及び本学学生・教職員約5000件について検査を行っている。

PCR測定自体は約70分/40検体/1サイクル/1 machineであるが、その後の処理としてデータのダブルチェック、報告書作成などがある。特に検体仕分け・到着確認などは手作業であり、嚴重に密封された容器からの検体取り出しなどは200検体の処理に3時間以上の手間がいる。その後、核酸処理、サンプル注入などを行うが、その処理にも3時間以上を要する。検体数は日によって変動があるが、250検体の検査では受付から結果報告まで7時間ほどの時間が必要である。最も多い時期の検体数は800検体を優に超えており、深夜12時過ぎても結果報告ができない状態となった事もある。

第7波に突入した最近では、600検体以上の外部からの依頼と臨地実習前学生や熱発した学生・教職員の検体数も増加している。

マスメディアによると医療現場も感染者の急激な増加対応に疲弊しているとのことである。山本先生、石田先生を中心としたPCR検査グループ（9名）は、検査を行う事で学内、社会貢献を強く考えているが、医療従事者と同様に疲労が蓄積しているものと思われる。

第5波時の昨年夏季休暇中（8月10～17日）もほぼ毎日出勤して検査を行ったが、本年もその可能性がある。コロナ検査グループが測定しなくてよい収束（終息）日が来ることを願っている。



搬入された検体を開封する
石田先生

オンラインでオープンキャンパス 九州中心に19人参加

キャリア教育研修センター

来年度、認知症看護分野の再開講を予定しているキャリア教育研修センターが17日（日）、オンラインでの説明会（オープンキャンパス）を実施し、九州を中心に19名が参加しました。

川口辰哉センター長が認定看護師を目指す人たちへの期待を語った後、飯山有紀課程長が特定行為研修を含む認定看護師教育課程や入試の概要について説明。本学の認知症看護分野や脳卒中看護分野の修了生に体験談を話してもらいました。参加者は熱心にメモをとったり質問をしたりしていました。

認定看護師教育課程は現役看護師が受講するため、勉強と仕事や家庭の両立に不安を持つ人が多くいます。今回の説明会は、そのような不安が軽減できるよい機会になったのではないかと思います。

（キャリア教育研修センター・内村香代子）



オンラインで実施されたキャリア教育研修センターの説明会

U20アジア選手権で初優勝

健康・スポーツ教育研究センターでは昨年度から、「くまもとワールドアスリート事業」を展開する熊本県スポーツ協会と熊本県教育委員会の委託を受け、県出身のトップアスリートのメンタル・フィットネスチェックを実施しています。

昨年、本学で測定を受け、フィードバック指導をした育成指定選手の一人で、レスリング女子の大野真子選手（日体大・北稜高校出身）が、先日のU20アジア選手権女子55キロ級で見事初優勝を果たしました。

本学でサポートした選手が、パリオリンピックを目指し着実に結果を出している姿に感動しました。これからもケガなく、着実に夢・目標に向かって進んでほしいと願っています。

（益満美寿）



昨年12月、本学でフィットネス測定を行う大野選手（右）

他人になりきり“自己PR”

面接想定し1年生 スライド使い堂々と発表

学生が他者になりきって自己PRをするというユニークな発表会が21日(木)=看護学科、26日(火)=医学検査学科、27(水)日=リハビリテーション学の3日間行われました。1年次生を対象とした全学必修科目「アカデミックスキルⅠ」の一環で、発表会は実際の就職面接も想定し企画されました。学生たちは1分30秒の持ち時間の中でスライドを使いながら、ペアを組んだクラスメートになりきって「自己PR」をしました。

授業が対面から遠隔に切り替えられたため、6月中旬にペアを組んだ学生たちは、専らテレビ会議システムを通じてお互いの情報を収集。発表原稿やスライド資料の作成に取り組んできました。各実施日とも2会場に分かれ、司会進行は受講生の中からアカデミックスキル支援センターが養成したリーダー学生が務めました。

発表会が始まる前は、緊張した表情を見

アカデミックスキルⅠ

せていた学生たちでしたが、いざ発表が始まると、クラスメートの堂々と発表をする姿や個性溢れる発表内容を目の当たりにし、前のめりになっていました。

司会進行を務めたリーダー学生たちは「滞りなく運営できるかという緊張もあったが、改めて他の学生の発表を目にすることによる色々な気づきや発見があり、新鮮な感覚を体験できた」と話していました。（アカデミックスキル支援センター 松尾健志郎）



クラスメートの発表を、真剣な表情で聴く医学検査学科の1年生=26日、3109講義室M

◆ 県外で初の単独説明会 宮崎、鹿児島

宮崎、鹿児島県内の高校の進路指導者向け説明会を、20日（水）に宮崎市のニューウェルシティ宮崎、21日（木）には鹿児島市のTKPガーデンシティ鹿児島中央で実施し、宮崎で4校、鹿児島県で6校が参加しました。大学説明会を本学が単独で県外で行うのは初めてです。説明会では、大学や入試の概要のほか、新設のスポーツリハビリテーションコースや言語聴覚士の必要性などについて説明しました。これに対して、参加者からは、年内に行われる総合型選抜などの入試やスポーツリハビリテーションコースの定員などに関する質問がありました。意見交換、情報収集という意味で貴重な2日間となりました。（入試・広報課）

◆ 都城西高の9人が大学訪問 宮崎県立都城西高校フロンティア科の9人が26日（火）、本学を訪問し、施設見学などを行いました。午前中、生徒たちは大学の概要説明を受けた後、古閑公治教授（医学検査学科）による生理検査を取り入れた模擬授業を体験しました。また、1号館～3号館の実習室や図書館エリアなど学内を見学しました。午後は体操服に着替え、アリーナで松原誠仁准教授（リハビリテーション学科理学療法学専攻）と本田啓太講師（同）による筋力評価や動作分析に関する模擬授業を受けました。（入試・広報課）



模擬授業で動作分析を体験する高校生